

「日本画制作における『地球』の表現の考察」

— 自作の原点を探る試み V —

藤 崎 いづみ

桜美林大学芸術文化学群

On the Expressions of the Earth in Japanese-Style Paintings
— A Quest for the Origin of My Works V —

FUJISAKI Izumi

College of Performing and Visual Arts, J. F. Oberlin University

キーワード：オンライン、未来、日本、Paris、新しい制作意識

1. はじめに

本論文は、2020年～2021年の筆者の教育と表現研究の新しいプログラムを記録する。それは、自身の主なる論文テーマである「自作の原点を探る試み」において、「自然界・自然現象・宇宙」の表現の考察について記してきた。今回は、その続編・総括として日本画制作における「地球」の表現考察として、それらの主題の分析と教育実践について述べていきたいと思う。風のように変化する今という時間の中で、自身の表現研究と教育、加えて日本の文化、日本の心について再考していく。因みに、筆をとる前の挨拶として、藤崎いづみ作品①『信頼』に込めたメッセージを記すとする。



「雪舟生誕600周年記念 第27回雪舟国際美術協会展」国立新美術館出品
藤崎いづみ作品①『信頼』紙本彩色 91.0cm×60.6cm

「睡蓮の花言葉は信頼です。どんな時も美しい生命が咲きつづく地球を信頼しています。」

2. 概要

本論文は、2020年～2021年の2年間の自身の表現研究と教育について、以下の項目でまとめる。そしてそこからの発展と未来予想を描くのが目的である。

①授業科目「ビジュアル・アーツ基礎」と「日本画ゼミ」での実践と気づき ②自身の日本画制作における、振り返りと探究について ③情報デザイン教育の究極の進化と、オンライン化について

これらの3項目に共通しているテーマが、本論文の主題「地球を描く」である。ここで、筆者の制作遍歴を辿るため、今までの一連の論考での考察を以下に抜粋する。

〔(中略) 自然・自然現象は、気候・光・空気等が、例えどんな風にうつろいゆく中でも、それでも生きていく、生まれかわっていく地球の産物と実感することができるのである。(藤崎 2015:pp.122)〕

〔(中略)人が自然の神秘的領域に必要以上にふみこむ事は、いかなるものだろうか。自然は見事な秩序と規則で成り立、その美とその存在は偉大である。日本画はそれを表現し実証する。(藤崎 2015:pp.124)〕

〔(中略) 日本画作品は風の向きも、雲の形も、水も、地球の色も、全ての自然の姿を様式美で表現していく。

自然の姿はそんな単純の中に複雑な美しさがあると、伝えていく日本美術の醍醐味を実感する。(藤崎 2015:pp.120)〕

〔(中略)「自然の宇宙的表现」とは、自然を最も巨大な自然物「宇宙」に包まれた「地球の自然」「日本の自然」としてとらえることである。(藤崎 2018:pp.205)〕

〔(中略) 日本画の技法は自然界・自然環境を表現出来、その世界観を豊かに伝えられる。この日本画の精神を、歴史日本画の大家、能書家の安田靉彦は「自然に学ぶことと、古典芸術に学ぶこと」という制作理念として伝えている。(藤崎 2018:pp.210)〕

また、e-Learning がより進んだオンライン・リモート教育の新時代に、情報デザイン教育の進化の報告も試み、大学のオンライン業務とハイブリッド時代の今、向き合うべき意識改革にもふれていく。そして、2020 東京オリンピック、パラリンピックの閉会式では、グローバルな視点で日本の文化にふれたスピーチがあったことも、この論考に記録したい。

3. 地球を見据え描くこと

3-1. 教育実践での「地球」表現 — 教育プログラムについて

2020年度のオンライン授業「ビジュアル・アーツ基礎」の「日本画」について記述する。新一年生の基礎科目「ビジュアル・アーツ基礎」は、芸術文化学群ビジュアル・アーツ専修の1年次春学期開講で、視覚芸術の多様な表現分野から7領域を体験学習する。それは「日本画」「立体造形」「映像」「テキスタイル」「平面デザイン」「プロダクトデザイン」「版画」の表現を、2週間ごとにローテーションして学んでいく。

筆者担当の「日本画」の作品課題テーマは「宇宙と自然、地球」であり、学生自身の視点でテーマ・モチーフを観察、観賞、観測し、ワークショップ形式で絵画表現するのが目

的である。また、日本画材「岩絵具」の特性・技法・筆使いの体験学習を通して、日本の美意識は「緻密・繊細・丁寧」であることを体得させる。

しかし、2020年度はウイルス感染対策でオンライン授業であり、在宅の1年生は自宅で多色の日本画の岩絵具が使えないため、ホームセンターでも手に入る練習用の墨汁で水墨画作品の展開を試みた。結果、半紙に滲むその練習用の墨汁独特の青や赤の滲み、オレンジの光のような効果が面白く、150名の1年生は、実に現代的な感性で伝統的な墨絵を描いた。筆者はその若い感性からヒントを得て、自身の制作の未知の領域に応用してみた。それは、2021年1月に開催した環境芸術学会主催『樋口雄一とアーティストたちのロボット展－新しい環境芸術の広がり－』での作品である。環境芸術学会は、身体から宇宙へ広がる幅広い領域における創作活動を対象としている。その一環として、著名なロボットデザイナーである樋口雄一氏を招待し、会員9名と共にロボットをテーマ・モチーフ作品とした協働展覧会を、神宮前のオリエアートギャラリーにて開催した。(協賛は富士ゼロックス株式会社) 筆者は墨で、ロボットのペッパー君を描いて出品したのである。筆者にとり、この作品制作と発表はまさにチャレンジ



藤崎いづみ作品②『pepper』
紙本彩色 72.8cm×103.0cm

であった。それは、筆者は花や自然、宇宙という有機的なテーマによる日本画制作が主体であり、メカニクなロボットを描く、それも墨で描くのは未経験の領域であるが、結果、水墨画でのロボットのペッパー君の制作により、考え方の枠を広げ表現領域を拡大する大切さにたどり着いた。実際の制作にあたり、墨は2種類の墨を使用し、ひとつは1年生のビジュアル・アート基礎（日本画）のオンライン授業対策で採用した練習用墨汁で描き、もう一つの墨は水墨画専用的高级な墨で描き、他には岩絵具で彩色も試みた。左の図はオリエアートギャラリーでの展示風景である。

ここからは2020年度の日本画ゼミについて記述する。2020年度の藤崎ゼミ（日本画）学

生は、同年12月に国立新美術館での「雪舟生誕600周年記念 第27回雪舟国際美術協会展」で大学生特別出展・桜美林大学コーナーで作品発表した。協会展は「多種多様な作風が見られる公募展」をスローガンとする絵画、書画作品を堪能する企画展であり、桜美林大学コーナーは協会事務局が、ゼミ学生作品から優秀作品を選抜して、展示するのである。又、同じ会場に出展の筆者の作品は、冒頭で紹介した藤崎いづみ作品①『信頼』紙本彩色91.0cm×60.6cmである。

ゼミで選出された10名の作品の、2020年の作品テーマは「宇宙と自然、地球」である。

作品には若い学生が感じるコロナ禍での想いが込められたメッセージや自然観が多く感じられた。その中から時代と社会、今の地球を、彼らの心に映った作品に寄せる釈文メッセージで、一部紹介したい。

①佐原菜々恵「天地創造」岩絵の具/墨/雲肌麻紙 72.8cm × 103.0cm

「神は7日間で世界を創った。」僕が幼い頃に聞いた話が本当ならば、何故神様はこんなにも不完全で悲しみに満ちた世界にしたのだろうか。その頃の未熟な頭で出した結論はこうだった。「創り上げた」のではなく、「創ることを止められなかった」のだと。

②嶋原亜斗「ひとと気のない街頭」岩絵の具/墨/雲肌麻紙 72.8cm × 103.0cm

「新型コロナウイルスの影響で街から人がいなくなり代わりに動物が見られる様になったというニュースを見た。映画やアニメの様なその光景は強く印象に残った。普段は人が溢れる渋谷の街に日本人に馴染みのある鹿を置き、その違和感でニュースを見たときの感覚を表現した。」

また、半年後の2021年の6月には芸術文化学群の新校舎、東京ひなたやまキャンパスで学内展示を行った。それはキャンパス初の来学型オープンキャンパスでのゼミ作品展であり、ゼミでは初めての2世代展示を展開した。大学HPに掲載された大学広報部取材と筆者のインタビューを抜粋する。

「東京ひなたやまキャンパス初となる来学型オープンキャンパスで芸術文化学群ビジュアル・アーツ専修のゼミ展を開催-藤崎ゼミ(日本画)では2世代展示-(中略)主に日本画を担当する藤崎いづみ教授のゼミでは、同ゼミ初となる2世代展示を展開。2020年度のゼミ生の作品は、昨年12月に国立新美術館での「第27回雪舟国際美術協会展」大学生特別出展・桜美林大学コーナーで展示された巡回展である。(中略)2021年度のゼミ生の作品は「2021年の自由」がテーマ。先輩達のテーマを受け継ぎ、それはコロナ禍2年目に痛感すること、今年の「今」の思いを2021年の自由というテーマで表現しています。藤崎教授は、この一年の活動を振り返り「コロナ禍だからこそ、筆に込めたゼミ生の想いが強いです。今、伝えたいこと、切に思うこと、それは不自由な時代ですが作品制作にこそ自由があるということ、次世代に繋がるような展示にしたいと思い、昨年度のゼミ生の作品も展示することに。(中略)ゼミ生たちは学内の人が作品の前で足を止めている点に喜びを感じているようでした。学内展示を行う価値を改めて気づき、コロナ禍だったからこそできた今回の展示だったと思う。」また、展示会場では、映像ゼミの学生が国立新美術館で取材撮影し、編集した動画配信もディスプレイしています。(https://www.obirin.ac.jp/info/r11i8i000007nz8c.html)」

3-2. 表現研究での「地球」表現-自身の日本画制作について-

ここでは、自身の日本画制作における、現在の立ち位置と未来へ提言は何か、具体的に探ることとする。まずは、前回の論文「日本画制作における『宇宙と自然』の表現の考察」4. 新作「宇宙の花Ⅲ」-未来への発信-に記述の、藤崎いづみ作品③『桜と宇宙』を起点として記していく。この作品は、筆者の表現研究や仕事のサポートを依頼している卒業生のフォト作品からイメージして、筆者独自の地球の自然観照の表現に仕立てた。

その作品は日本の自然と美を、若い感性とつないでアウトプットしてみた面白さがある作品となった。その表現の考察から次の表現研究と教育へ分析を綴るとする。

筆者は華やいで咲く日本の自然と、「宇宙」という普遍的な主題にこだわり、日本画制



藤崎いづみ作品③『桜と宇宙』
紙本彩色 91.0cm×60.6cm

作発表している。そんな要素から藤崎いづみ作品③『桜と宇宙』は生まれたのである。空を描く際に大切にしていることがあるし、最近空を描きたいと思うのは、空は地球と宇宙を繋ぐ、自然現象、自然物であり、インターフェースでもある。そういえば、2020年～2021年の新しい情報化時代、次のフェーズの情報化革命かと思わせるニュースがある。宇宙から電波を受信する衛星通信スターリンクの話題である。衛星通信スターリンクは人工衛星をつないで宇宙を介して世界中に通信網を提供し、高速通信を実現する。宇宙からの衛星インターネットのサービスでKDDIがSpaceXの衛星通信「スターリンク」と業務提携を発表したプロジェクトである。空の向こうにつながる宇宙の衛星通信スターリンクは夢がある。情報化革命は続くのだ。空のように、宇宙のようにならなくても。そして、筆者の東京芸術大学大学院の恩師の手嶋有男先生¹⁾からは次のように教えられた。「雲は風の向きで形が変わります」そこからの発想で筆者は藤崎いづみ作品③『桜と宇宙』の宇宙と雲を描くにあたり、筆の穂先を軽妙につかうことなど、素直に拡がりを描いた。その桜に囲まれた空色の空間は、鑑賞者には地球に見えても、空に見えてもどちらにも感じとれるように仕立てた。その原理を佐治晴夫は、以下にあげている。

「(中略) ひとことで言えば、光はみる側の状況や、どういう装置を使って見ようとしているかによって、つまり、見ようとしている相手に対して、自分の姿を自由に変える、ということなのです。カメラのレンズを向けられただけで相手も表情を変えてしまうように、「見る」ということが、相手を変えてしまうということなのです。つまり、「自然界のものたち」は、みるものと、見られるものとが、互いに関わりながら、真実の姿を垣間見せているというわけです。(佐治 2007:p.214-215) (藤崎 2020 : pp.232)」

物理学者佐治晴夫の研究解析のように、筆者の作品も鑑賞者の感性に寄り添って、画面で表情を変えて、作品を楽しませるようにと、創意している。

3-3. 情報デザイン教育の究極の進化と大学業務のオンライン化

新しい時代に入り、情報デザイン教育は必須の課程となる。また、この2年間でのオンライン授業は、思えば見切り発車のスタートから進化が加速してきたと感じる。2020年～2021年の新しい情報化時代で、次のフェーズの予感の情報化革命では、教育現場、大学業務の変化も急速であろう。それは、拡大するデジタル・ネットワークに寄り添い、時代を反映するコンテンツやサービスを使いこなす必要がある、教育を受ける若者はメディアリテラシーへの感度が高い。進化する教育現場では、アナログとデジタルは同じ目的を

持つと実感するし、ハイブリッド授業がそれかもしれない。そして視覚芸術や教育は、時代を意識して、常に未来を生きる感性につなげるのが大切である。その理念を反映したディスカバ！プログラムの取り組みについて引用する。

「探究の学びに注目し、入試で探究力を重視した総合型選抜を導入する大学が出てきた。桜美林大は、高校生向けに探究プログラム「ディスカバ！」を提供し、2022年度入試から「探究入試 Spiral」を導入する。ディスカバ！は入学期が主導して19年から始めた高大連携プロジェクトで、学問分野を探究するプログラムを教員らが1万人近くの高校生に届けてきた。(朝日新聞 EduA.2021年9月号 p.5)」

これは、2022年度からの高校の新学習指導要領で「探究」がポイントであり、高校生が大学で何を学ぶのか、を見いだす目的を Zoom で提供する、いわゆるオンラインサロン講座である。筆者は、このディスカバ！プログラムを担当しその際、授業科目「ビジュアル・アーツ基礎」の日本画の授業の実践と気づきに記述した、オンライン授業の1年生の「ビジュアル・アーツ基礎」の「日本画」の「宇宙と自然、地球」の水墨画作品を参考作品として紹介した。その上で「ディスカバ！」には1年生もゲスト参加してもらったのである。全体のプログラムメニューは次の内容である。「アートのつながり ONLINE [With コロナで考えてみた新たな世界を描こう、創ろう！]」とは、With コロナで考えてみた新たな世界を、絵画または立体作品で自由に創り、高校生同士、大学教員とアートについて語るオンライン交流会である。この様に Zoom をはじめとしたネットワーク環境や、様々な端末機器により、オンラインコミュニケーション活動が活発になり、情報デザイン教育と大学業務のオンライン化は、刻々と前進する教育現場を形成する。

4. 日本の文化、日本の心

古き良き日本の美意識の中に、斬新な日本の美意識を描きたいし、目指したい。そこから、今という未来への制作意識を記すこととする。それは、2024年フランス Paris 開催のオリンピック開催を意識した制作で、自然界のエレメントにこだわった作品であり、惑星、地球、空と雲、虹、惑星に映る軌道、水面の波形、自然現象、自然界の様式美である。つまり日本の美の歴史は、様式美の歴史である、という筆者のこれまでの論述、そこにつながっていく。そしてこの作品は2021年12月の「第28回雪舟国際美術協会展」国立新美術館への出展作品であった。

日本の文化、日本の心について再考していく中で、2020東京パラリンピック閉会式の挨拶の言葉に制作に対する未来への提言を発見した。以下、国際パラリンピック委員会(IPC) アンドリュー・パーソンズ会長の2020東京パラリンピック閉会式の挨拶を一部抜粋する。

「(中略) 日本には古くからの美しい考え方で、金継ぎというのがあります。誰もが持つ不完全さを受け入れ、隠すのではなく大事にしようという考え方です。スポーツの祭典の間、私たちは違いを認め、素晴らしい人間性を発揮し多様性の中の調和を見せました。しかし、私たちの旅をここで終わらせてはなりません。今夜は閉会式と言うよ

りも明るくすべての人が共生できる未来への始まりと捉えてください。今、私たちの地球は重要な岐路に立たされています。どんなマスクもその傷を覆うことはできません。(中略)(NHK 総合東京 2020 パラリンピック閉会式 2021年9月5日)」

日本の感性を描きたいのは時代が動いても、情報化が躍進しても、宇宙からデジタルネットワークが配信可能になっても実現しても、どんな長い歴史の流れの中でも日本のこのころのあり方は変わらない魅力があるからだろう。それが金継ぎの技法のようだと、2020 パラリンピック閉会式のアンドリュー・パーソンズ会長のメッセージで再確認した印象である。

5. 未来への制作意識

最後に、未来への制作意識を紹介したい。これは、和紙の空間を意識した大漁旗がテーマの藤崎いづみ作品④『富士山桜波図(小)』である。地球をテーマに見据えた作品で、2021年11月フランスパリのリンダ・ファレル・ギャラリー主催のグループ展で出展発表した。この作品は「大漁旗」をテーマとした「富士山桜波図」の2作目で、フランス Paris 出展のための小作品である。もともとは2021年6月に、環境芸術学会主催での「大漁旗」をテーマに「海の世界」や「未来へのメッセージ」を込めた企画の、「大漁旗アート展 2021」での発表が第一作であった。筆者は、どちらの作品も和紙の空間を活かした「書」と、「富士山」を囲う波濤と桜しぶきを彩度の高い日本画材で描いてみた。それは地球の未来永劫を信じて、地球の表面積を創っている海への思い入れである。更に、もっとも新しい未発表作品を掲載して制作意図を述べてみたい。



藤崎いづみ作品④『富士山桜波図(小)』紙本彩色 19.1cm × 33.4cm



藤崎いづみ作品⑤『未来へ』
紙本彩色 91.0cm × 60.6cm

6. 結語

宇宙を介して世界中に通信網を提供し、高速通信を実現した衛星通信スターリンクにより宇宙は地球から、より身近なものになりそうである。筆者にとって、この2020年～2021年は制作の難しさを実感した時間であった。冒頭でも伝えたが風のように変化する今という時間の中、筆者の制作理念も刻々と変化、進化しておりそれにとまなう悪戦苦闘の連続であった。今回の論文を綴るにあたって、制作遍歴を辿る時間軸で、未来に進む原点回帰を探り、ひとつの達成感を味わっている。

7. 謝辞

本稿の執筆にあたり、ご指導頂いた武蔵野美術大学小石新八先生に感謝申し上げます。

註

1) 1930年～2013年 工芸家。元東京芸術大学美術学部教授。

参考文献

- ・左治晴夫(2007)『からだは星からできている』(株)春秋社 p.214-215
- ・藤崎いづみ(2015)「日本画制作における『自然・自然現象』の表現の考察—自作の原点を探る試みⅡ—」桜美林論考『人文研究』第6号、p.120、122、124
- ・藤崎いづみ(2018)「日本画制作における『自然界・自然環境・宇宙』の表現の考察—自作の原点を探る試みⅢ—」桜美林論考『人文研究』第9号 p.205、210
- ・藤崎いづみ(2020)「日本画制作における『宇宙と自然』の表現の考察—自作の原点を探る試みⅣ—」桜美林論考『人文研究』第11号、p.232
- ・(2021)朝日新聞 EduA.2021年9月号 p.5
- ・(2021)NHK 総合 東京2020パラリンピック閉会式 2021年9月5日
- ・IEAD 環境芸術学会企画 大漁旗アート展 2021フライヤー (2021)
- ・IEAD 環境芸術学会 2021年度コラボレーション企画展 樋口雄一とアーティストたちのロボット—新しい環境芸術の広がり— フライヤー (2021)
- ・桜美林大学 HP 芸術文化学群ニュース(2021)・<https://www.obirin.ac.jp/info/r11i8i000007nz8c.html>(2021年7月13日現在)
- ・桜美林大学プログラム | ディスカバ! 高校生のためのキャリア支援プログラム <https://discova.jp/program/4th-2/> (2021年10月10日現在)
- ・宙畑 SORABATAKE (2021) <https://sorabatake.jp/19526/> (2021年10月4日現在)

作品リスト

- ・藤崎いづみ作品①『信頼』紙本彩色 91.0cm × 60.6cm 2020年制作
- ・藤崎いづみ作品②『pepper』紙本彩色 72.8cm × 103.0cm 2020年制作
- ・藤崎いづみ作品③『桜と宇宙』紙本彩色 91.0cm × 60.6cm 2019年制作
- ・藤崎いづみ作品④『富士山桜波図(小)』紙本彩色 19.1cm × 33.4cm 2021年制作
- ・藤崎いづみ作品⑤『未来へ』紙本彩色 91.0cm × 60.6cm 2021年制作